

ダブリン便り

栩木 伸明

ダブリンの中心部から北へ向かい、電車で三十分ほど揺られていくとハウス岬に着く。駅の裏はすぐ港だから、ホームに降り立つと潮の香りがする。この路線はとても古くからあって、詩人 W・B・イエイツは「美しくて気高いもの」を列挙する最晩年の詩の中で、若き日の恋の記憶（一八九一年のことだ！）を胸の奥から掘り出して、「ハウス駅で車を待つ／モード・ゴン。背筋を伸ばし、傲然と顔を上げたパラス・アテナ」（W. B. Yeats, *The Poems*, ed, Daniel Albright, Everyman's Library, 1992, p. 350）と書いている。モード・ゴンはイエイツの求婚を拒み続けて、彼に恋愛詩の傑作を数々書かせた女性である。

ハウス岬は 'Howth' と綴るので、インターネットの地図では「ハウス」と表記されていたりするのだけれど、発音が間違っていると切って捨てるのは忍びない。この岬には「ザ・ハウス」という気の置けないレストランがあるからだ。シーフードがおいしい料理店の看板を掛けて、余生を保っているこの古い家には、かの有名なバウンティ号で水夫たちの反乱が起きたときの船長ウィリアム・ブライが住んでいたそう。一九人の乗組員たちとともにボートで大海原へ放り出される運命など知るよしもなかった若き日、ウィリアム・ブライは見晴らしのいい高台にあるこの家に滞在して、ダブリン湾一帯の測量調査をおこなったと伝えられる。一八世紀の末の話だ。岬の近くに住む詩人パット・ボランがこんな俳句を書いている――

悲しいかな、先が読めなかった

ブライ船長

バウンティ
ご褒美が迫っていたのに

（パット・ボラン作、「波のかたちの群れなす俳句」栩木伸明訳、
『現代詩手帖』、二〇一九年三月号）

「ハウス」は友人の詩人夫妻テオ・ドーガンとポーラ・ミーハンのお気に入りの店なので、何度か連れてきてもらったことがある。このひとたちと一緒にいると、活字や写真やテレビやコンサートでしか知らなかった詩人や小説家や俳優や音楽家にしばしば出会ったり、紹介されたりすることになるので、気後れしてしまう。この国では日本よりも、詩人が社会的に一目置かれているとはいえ、〈アイルランド詩歌教授〉（詩人シェイマス・ヒー

ニーのノーベル文学賞受賞をきっかけに設けられた名誉あるポスト、任期三年）をつとめたポーラと、詩の振興機関ポエトリーアイルランドの初代ディレクターをつとめた後、ラジオにひんばんに出演したり、多彩なエッセイを書いたりして詩の愛好家以外にも知られてきたテオは別格なのだ。

一九九四年の夏のある日、いまはなきダブリンのウォーターストーンズ書店で、ポーラが詩集『ピロー・トーク』の刊行記念朗読会をおこなったときの、ひとつの光景が目に焼きついている。会が始まる前にエントランスの脇でタバコを吸っているふたりの男と、ひとりの小柄な女性がいたのだが、それがテオとキアラン・カーソンとポーラだった。

頭に入っている詩行を順々に解き放つかのように、ことばを静かに繰り出していくポーラの朗読にノックアウトされて、学生気分が抜けない日本人の大学教員は、生きている詩人をもっと知りたいと思った。アイルランドの詩人たちを追いかけて、インタビューしてみようと思い立ったのはあの瞬間だった。『ピロー・トーク』に心を動かされたのはぼくだけではなかったらしい。その証拠に、あの詩集はあれ以後爆発的に売れ、よい書評もたくさん出て、ポーラ・ミーハンに世代を代表する女性詩人と見なされるようになったからだ。

キアラン・カーソンは当時、北アイルランドのアーツカウンシルに勤務していたが、後にベルファストのクイーンズ大学にシェイマス・ヒーニー記念ポエトリー・センターができると、初代の主任教授になった。ぼくから見れば兄や姉にあたる年代の彼らが二十五年かけて、それぞれの詩の世界をつくってきたのだとあらためて気づかされる。

じつは今、ぼくはテオとポーラの家で暮らしている。彼らがギリシアの島へ行っている五週間あまりのあいだ、この家で留守番をしているのだ。この家はホース駅のひとつ手前の、サットン駅で降りたところにある。五、六分歩けば海辺に立てるこの地区は昔の漁師村で、バルドイルと呼ばれている。「バルドイル」はアイルランド語で、「黒髪のおそ者の町」を意味する。今から千年以上前、デンマーク系のヴァイキングたちがこのあたりへやってきて、集落を営んだ遠い記憶が地名に残っているわけだ。バルドイルを含むダブリン北郊の地域——今では州に昇格した——は「フィンガル」。こちらは「金髪のおそ者」という意味で、ノルウェー系のヴァイキングが村をつくった記憶が地名に刻印されている。

二十五年前には黒々していたぼくの髪は今ではすっかり色あせて、金髪ならぬ白髪のおそ者になったけれど、四半世紀の歳月は詩人たちの人生だけでなく、アイルランドをも大きく変えた。一九九六年頃にはじまった〈ケルティック・タイガー〉と呼ばれる経済バブルをへた後のアイルランドは、移民を他国へ送り出す国から、移民が殺到する国へと変貌をとげた。

この国に3ヶ月以上滞在することを望む者は、〈アイルランド帰化・移民管理局〉へ

行って外国人登録をしなくてはならない。以前、アイルランドに住んだときには、銀行口座の残高証明を提示したり、身元保証人に一筆書いてもらう必要があったりした。何回も管理局へ通って長蛇の列に並んだあげく、そのつど新しい必要書類を告げられて、徒労感を味わわされたのを思い出す。近頃は長蛇の列がなくなって、ネットであらかじめ予約してから行くのだと聞かされて、そいつはいいと思ったのだが、いざ予約しようとする、「予約日時は最大で一〇週間先になることがあります」という注意書きがまず最初に出てくる。そして、個人情報とせつせと入力した締めくくりに「予約」ボタンとぽんと押すと、何度やっても「予約可能な日時がありません」が出てきて、うんざりさせられてしまう。徒労感はどうやら、今もますます健在なのだ。

外国人登録の予約の取りにくさは、アイルランドへ働きにやってくるひとたちがいかに多いかを如実に反映しているのだけれど、その話はまたの機会にすることにして、今はこの〈アイルランド帰化・移民管理局〉の略称に注目したい。この役所は英語の頭文字をとって〈INIS〉と呼ばれている。アイルランド文学に親しんだひとなら、ちょっと考えてから、ははあん、なるほどね、と思わされるネーミングである。「イニッシュ」とカタカナ表記にすればわかりやすいだろうか。J・M・シングの紀行文を読んだり、アラン諸島へ行ったことのあるひとがいれば、「イニッシュ・モア」(Inis Mór = 大島) という名前を覚えているかもしれない。「イニッシュ」はアイルランド語で「島」を意味する。

だが「イニッシュ」と聞いて、アイルランド人がまず連想するのは、W・B・イエイツの「湖の島イニスフリー」という詩のタイトルだろう。「イニッシュ・フリー」(Inis Fraoigh) というアイルランド語の地名は「ヒースの島」という意味だけれど、イエイツが英語化した綴りで書いた‘Innisfree’をぱっと見ると、「自由の島」という意味が目飛び込んでくる。

全文を拙訳で読んでいただこう。

さあ立って行こう、イニスフリーへ行こう、
小さな小屋をあそこに建てよう、枝を編んで粘土で固めて。
豆を植えよう、九うね植えよう、蜜蜂の巣箱も持とう、
あそこで僕は一人暮らし、林の空き地は蜂の羽音。

あそこへ行けば凝りがほぐれて、平和がゆっくり滴ってくる
朝のとばりが開くときから、コオロギが歌う時間まで。
真夜中の空は微光を放ち、真昼の空は紫に燃え、
夕方の空いっぱいムネアカヒワが飛び交わす。
さあ立って行こう、夜となく昼となく

湖岸を洗うさざ波が聞こえているから。
都会の街角、灰色の舗道にたたく僕の
心臓の真ん中の一番奥で、その音が聞こえているから。

(Yeats, p. 60)

この詩は一八八八年にロンドンで書かれた。大都会になじめず、田舎が恋しくなった詩人は、母方の実家があるアイルランド西部のスライゴーを思い出してこの詩を書いたのだ。イニスフリーというのは、スライゴーの町の東方にあるギル湖に浮かぶ小さな島である。

ようするにこれは、ホームシックを慰める夢想の島が描かれた詩なのだが、一三〇年経った今、帰化・移民管理局の略称に「イニッシュ」が転用されると、アイルランドという島は、いろいろな色の髪をした「よそ者」たちの夢が叶う島である、という意味が生じてくる。アイルランドの古い伝説によれば、西の海の彼方に「常若の国」という名の楽園^{ティル・ナ・ノグ}があるという。アイルランドから新大陸へ渡って〈アメリカンドリーム〉を叶えることも、ティル・ナ・ノグへたどり着くひとつの方法だった。ところが今では、アイルランドという島こそが、「よそ者」たちが夢を叶える〈チャンス^{ティル・ナ・ノグ}の国〉になった。時代は変わり、アイルランドは別の国へと変貌を遂げたのだ。

バルドイルの家で暮らしながら、白髪の「よそ者」はイエイツの詩を翻訳している。翻訳作業がことばをいじる作業に尽きるのであれば、詩が書かれた場所で訳すことの意味などありはしないだろう。だが、文学の翻訳は文化を翻訳することだから、現場に身を置いたせいでしみじみとわかることは少なくない。

たとえば、「学童に囲まれて」というよく知られた詩の締めくくりの四行はこんなふうになっている。

O chestnut tree, great-rooted blossomer,
Are you the leaf, the blossom or the bole?
O body swayed to music, O brightening glance,
How can we know the dancer from the dance?

(Yeats, p. 263)

この一節は、有機的な存在を細かい部分に切り分けることはできるのか、あるいは、ダンサーという人間とダンスという現象を区別できるのか、などなど、美学的ないしは存在論的な問いを読者に突きつけてくる詩句である。だがさしあたってのぼくの興味は、この‘chestnut tree’が「栗の木」なのか「トチノキ」なのかという問いにある。古い翻訳は軒並み栗だが、新しい翻訳はトチノキになっている。トチノキはぼく自身の名前でもあるの

で、無関心でいられないから断言できるのだが、この単語の訳語としてはトチノキに軍配が上がる。アイルランドに栗の木は生えないし、栗のことはふつう ‘sweet chestnut’ と呼ぶ。焼き栗を売っているのも見たことがない。その代わりにトチノキはいたるところに生えていて、天狗の団扇のように広がった群葉を眺めることができる。たとえばハウス岬の森へ足を踏み入れれば、トチノキの大木がありふれた風景の一部として目に入るのである。

とはいえ、初夏の今、ハウス岬でトチノキに目をとめるひとはあまりいないだろう。シャクナゲの花があまりに美しすぎるからだ。先ほど俳句を引用したバルドイル在住の詩人バット・ボランの近著の中に、「ハウス岬のシャクナゲの森で」という詩を見つけた――

犬を先に立てて、この丘を歩きに来るとき、
シダやイラクサを縫って、まず最初の険しい石段を登り、
奥へ行くほど密度が増していくシャクナゲの森へ入り、
中国の提灯みたいに嘘っぽくて
幻覚を呼び覚ましそうな花の群れを目にすると、
山の反対側にもほぼ似たような、着実なペースで
こっちの方向へ登ってくるもうひとりの男が
きつといる、と夢想することが時折あるのだが、
その男も犬連れて、
こちらときっちり同じ歩幅でやってくるので
うっかり鉢合わせしてしまう――
葉っぱが覆い被さったところから
日なたへぱっと出て、
互いに逆回りで行ってきたふたりと二匹は
丘の頂上で出会うと間もなく、
あるいは、彼方の峰々や道路に目をやり、
遠くの住宅地の一軒の家の窓ガラスに
日光がぎらりと反射するのを一瞥すると間もなく、
お互いの匂いをたどりながら去っていくのだ。

Pat Boran, ‘Rhododendron Gardens, Howth’, *Then Again*,
The Dedalus Press, 2019, p. 39)

バットはこの家の前に広がっている真四角な公園の斜め向かいに住んでいる。この詩に

出てくる犬のモデルは、彼の愛犬でジャーマン・セッターのコーディーに違いない。コーディーは二歳のやんちゃ盛りだから、ハウス岬のシャクナゲの森へ行きたがっているはずだ。ぼくもこの文章を書き終えたら、岬までパットの車に便乗させてもらうことにしよう。今日は長い散歩が楽しみである。

二〇一九年五月、ダブリン北郊、ハウス岬に近い
フィングラス州バルドイルにて